雨の日に誓う、ひとつの約束

峻司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨の日に誓う、ひとつの約束

【Ｎコード】
Ｎ９４５７Ｅ

【作者名】
峻司

【あらすじ】
母の計らいで見ず知らずの青年と一緒に住むことになってしまった女子高生の篠宮麻衣。はじめは戸惑いつつも、徐々に心を許していく。しかし、彼はいったい誰なのか。その正体が分かったとき麻衣の心に芽生えたものは。

第一話　出会い

私が篠宮誠と出会ったのは、季節外れの雨が降るある夏の日のことだった。
初めは戸惑ったし、最後も悲しいことばかりだった。
けれども、私はあの日々を決して忘れないだろう。あのとき誓った一つの約束と共に。

「ねえねえ、麻衣！駅前のデパートで夏物セールやってるんだって！これから一緒に行こうよ！」

帰りのホームルームが終わるなり、私の机に駆け寄ってきた裕子がそう言って誘ってきた。
帰り支度をしていた鞄の上に「夏物売り尽くしセール！３０％ＯＦＦ」と書かれた広告を広げて私に見せてくる。

「朝刊にはさんであったんだよ」

「へぇ、裕子って毎日新聞読んでるんだ。えらいね」

「ま、まあね」

腰に手をあてて軽く胸をはる裕子。
きっとテレビ欄だけなんだろうなぁと思いつつ、部活も入っておら

ず暇を持て余している私は、「いいよ、いこっか」と答えた。
「うん、行こう行こう！」といいながらスキップで教室を出て行く裕子を、あわてて追いかけた。
校舎を出ると、空には分厚い雲がこれでもかというくらい垂れ込めていた。嫌な空模様だ。どうか雨が降りませんようにと祈りつつ、私たちはデパートに向かった。

私のささやかな祈りもむなしく、買い物を終えてデパートから出たときにはどしゃぶりになっていた。

「ごめんね、私が誘ったばっかりに。私傘買って来るよ！待っててて！」

何も言い返す間もなく、裕子は駆け出していた。
裕子は普段は強引だけれども、妙なところに非常に気を使う。でもそういうところに好意が持てて友達をやっているのかもしれないと私は思う。
裕子の姿が見えなくなると、私は再び空を見上げた。学校を出たときよりも空が黒く染まっていた。
これでははは当分やみそうにない、天気予報だけでもちゃんと見てこればよかった。お母さんが
海外に出張に行ってからは、私はいつも朝ギリギリの時間に起きていた。あわてて着替えてト

ーストをくわえながら駆け足で家を出る、そんな感じ。お父さんは私が生まれてまもなく交通事故で亡くなっている。だから私は今一人で暮らしているのだった。

買い物を済ませた客達が色とりどりの傘をひらいて雨の中へ出て行く。そんな中、帰る人たちとは逆にこっちに近づいてくる赤い傘が見えた。さしているのは男性で誰かを探すように視線を彷徨わせている。スラリとした体型で、スーツが良く似合う。

恋人でも迎えに来たのかな、と思っていると目が合った。

一瞬の間を置いて、彼は優しい笑みを返してきた。

そして私のいる玄関まで来ると、

「こんばんは、君一人？」

と訊いてきた。さわやかな感じの青年で、年は２０代前半だろう。

「いえ、友達と来てるんです。今はちょっといないんですけど」

「そっかぁ。制服ってことは学校の帰りかな。じゃあさ……」

「麻衣！大丈夫！？」

急に腕をつかまれた。そちらを向くと裕子がいて、驚いた表情で私を見てから男性を睨み付けた。

「この子私の友達なんですけど、何か用ですか？」

普段とは違う低めの声で問う。

すると彼は裕子の剣幕にたじろいだと思いきや、それを無視して私

に聞いてきた。

「もしかして、篠宮麻衣ちゃん？」

驚いた、というよりもむしろ怖かった。初めてあったであろう男性に名前を知られているのだ。

私の驚愕の表情を見て肯定だと受け取ったのか、

「そうかそうか」

と、やたらうれしそうな顔をしていた。

「麻衣行くよ！すみません私たち急ぎますので！」

ぼーっとしていた私は腕を引っ張られて我に返った。

そのまま雨の中へ躍り出る。

ふと彼を振り返ると、さっきと同様に笑顔で手を振っていた。何か言ってるような気がする。

またあとで？……あとでってなに？怖い。

普通はただのナンパ男にしか思えないが、そのとき私は同時に懐かしさにも似たものを感じていた。何だろう、遠い昔、何処かで聞いたような声、会ったことがあるような感覚だった。

「ここら辺はナンパしてくる人が多いから気をつけなさいよ？ただでさえ麻衣はぼんやりしてるんだから」

「……うん、わかったわ」

「よろしい、じゃあ次はあのデパートね！」

あ、まだ行くんだ。

第一話　出会い（後書き）

まったり更新していきます。

第二話　戸惑い

「遅くなっちゃったな」

買い物の後、裕子と外食して家まで送ってもらった。
私の家は閑静な住宅街にある日本建築のお屋敷で、結構な土地面積をもっている。母によると、我が家はそうとう古い歴史があるらしいが、興味のない私はそれ以上は知らない。
玄関の前で鍵を取り出す。そのまま鍵を開けるはずが、逆に鍵をかけてしまった。
朝急いで閉め忘れたのかな。
無用心な自分に苦笑いしつつ、再び鍵を開けて玄関に入り、靴を脱ぐ。ふと、傘立てに見覚えのある赤い傘があるのを見つけた。いやな予感を感じながらも、ゆっくりと長い廊下を歩いて居間に近づくと、テレビの音が聞こえる。そっと扉の隙間から中を覗くと、ソファーに座りながらテレビを見ている人がいた。お笑い番組を見ているようでしばし笑っている。
動悸が激しくなり、手にいやな汗がにじみ出てくる。
唾を飲み込み、思い切って声を掛けてみた。

「だ、だれですか」

上擦ってしまい、思っていたほど声が出なかった。しかしその人物は気づいたみたいで顔がこちらを向く。

「ん？ああ、おかえり。遅かったな」

その顔には覚えがあった。デパートでナンパしてきたあの人だ。
さっそく廊下に逃げ出した私に気づいたのか、慌てて声をかけてき

た。

「ちょっとまった！はい、これ。君のお母さんからの手紙」

お母さんから、という言葉に反応して足が止まった。もしここで彼が嘘をついていたらと後から考えると、つくづく恐ろしい。
追いかけてきた彼から、恐る恐る手紙を受け取る。それは母らしいシンプルなデザインの便箋だった。

突然の出張でごめんなさいね。
麻衣を一人にさせておくのが不安だったので、親戚の篠宮誠さんにお願いして麻衣の面倒をみてもらうことにしました。
とても良い人なので仲良くしてあげてね。

母より

手紙は簡潔にそう書かれていた。
親戚の人？こんな若い人いたっけ？

「はじめまして……でもないか。まあ、改めてはじめまして、篠宮誠です。そこにも書いてあると思うけど、小百合（さゆり）さんから外伯中麻衣ちゃんの世話をしてくれってことだからよろしく。学校でいじめられたりしたらすぐに俺にいってこいよ？」

まるで子どもあつかいだ。でも少しは空気が和んだ気がする。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

それでもまだ緊張してるな、私。

「勝手にティーメーカー使わせてもらったよ」

机の上にはほのかに芳香を漂わせたティーカップが置いてあり、その隣にはポットが置いてある。私も母も家では紅茶を入れようとはしない。だからそのティーメーカーは父がいなくなってらは奥のほうにしまってあったものだ。もちろん茶葉などないからさっきデパートにいたのは買いに来ていたってことだろうか。

「いいですけど、よく場所分かりましたね。あと使い方とか」

「まあね、俺紅茶好きだから」

微妙に答えになっていないことを言いつつ、次は風呂使ってもいいかな？と聞いてきた。そしてそれをきっかけに家の間取りなど生活に必要なことを伝えた。説明している間、なんとなく上の空だったが、ここに屋根裏ってあったよね、と言われたときには驚いた。なんでも昔私が生まれたぐらいのときにこの家に来たことがあるというのだ。私が１６歳だから彼がだいたい７歳ぐらいの時だろうか。部屋は客間を使ってもらうことにした。

私も風呂に入り、自分の部屋に入って扉を閉めるとため息をついた。お母さんの伝言があるとはいえ、急に同居人が増えて頭が混乱中だ。でも一番の悩みはやはり。

せっかく一人暮らしが満喫できると思ってたのになぁ……。

第三話　衝突

昼休みの教室、私は裕子と机を向かい合わせて弁当を食べている。
と言っても私は、とても朝作る気力がわかないから購買のパンだ。
裕子は携帯をいじりながら食べている。きっといつもの星座占いだろう。

「やった！しし座は、趣味が合って意気投合！すてきな男性と出会えるかも！？だって！」

自分の星座に大満足した裕子は、麻衣のも見てあげるね、と言ってきた。

「ふたご座は・・・っと、なになに？危険な一日、身近な人にご用心、味方であるとは限らないかも・・・」

私はパンをくわえたまま固まってしまった。
そうか、危機感が足りなかったのかもしれない。男性と一つ屋根の下で暮らすなんてもってのほかではないか。
私が黙り込んで真剣な表情をしていたのを気にかけたのか

「き、気にしないほうがいいよ！所詮は占いなんだからさ！」

と言ってきた。それでも沈黙している私に

「何かあったの？」

と心配した表情で聞いてきた。

「・・うん、あのね、驚かないで聞いてくれる？」

「驚かないよ、話してみて」

「・・・ほら、昨日デパートの前で会った男の人覚えてる？」

「そりゃ覚えてるよ。それがどうかしたの？」

「一緒に暮らすことになった」

裕子のはしが止まる。しばらくの沈黙の後

「えーー！？なんで？意味わかんない！すぐに追い出したほうがいって！」

「でも、親戚の人だっていうし・・・・」

私が再び黙り込んでしまうと

「わかった、わかったわよ！今日麻衣の家行って話しつけてあげるから！そんな顔しないの」

「うん、ありがとう裕子」

日ごろからなにかと裕子に助けられてる私は、今回も厄介ごとに巻き込んでしまって悪いな、と思いつつも、そんな親友がいることがうれしくなって同時に安心した。

「ただいま」

授業後、今日は道草をせずに裕子を連れてまっすぐ家に帰った私は、玄関を開けてそう言った。後ろから、おじゃまします、と言う裕子の声がいつもより固い。

「おかえり！」

廊下の奥、居間に隣り合った台所から男性の声が返ってきた。今まで女二人で暮らしてきたのでとても違和感を感じる。
裕子と共に台所を覗くと、中からいっきにカレーの匂いが漂ってきた。思っていたとおり台所ではエプロンをした誠がカレーを煮込んでいる。そして私の顔を見ると再び、笑顔でおかえり、と言ってきた。

「夏はやっぱりカレーだよな！と言うわけでうまいか分からんけどカレーを作ってみた。どうせいつもコンビニ弁当とかだったんだろう？しっかり栄養はとらないとな」

そんなことはない。弁当は作らなくても母が出張に行ってから数日間、夜はちゃんと自炊をしていた。・・・・焼きそばとか。
そんな私の思いをよそに、裕子を見つけると

「あれ？友達来てたのか。ちょうどいいよ、食べていきなよ」

と言った。

「いえ、私は・・・」

「遠慮せずにさ」

強引にすすめてくる誠に対して、裕子はしぶしぶといった感じで席についた。

私の家がお屋敷といっても、内装はリフォームしていて一般的な家庭の台所や居間となんら変わりはない。そこにあるテーブルに三皿のカレーが並べられ、三人が席に着き、ばらばらにいただきますをした。

誠はなぜかうれしそうにカレーを食べている。

裕子はそんな誠を、訝しげな表情で見つめながら食べている。

私はというとこの状況でどうすればいいか分からず戸惑っていた。

気まずい・・・。

ふと、誠が質問をしてきた。

「麻衣ちゃんの友達だよね？名前なんていうの？」

そうか、紹介わすれてた。

「あ、私の友達で同じクラスの裕子です」

裕子が「どうも」と誠に向かって言った。学校ではよくしゃべる裕子も今は口数が少ない。

「で、こちらが私の親戚の篠宮誠さん」

「よろしく。昨日会ったよね？」

「はい・・・」

会話が続かない。私は横目で裕子を見ると、裕子の視線は誠ではなく、ほかの一点に注がれていた。そこには昨日誠が使っていたティーメーカーが置かれている。

「もしかして紅茶飲まれるんですか？」

誠に聞いていた。私が紅茶に興味がないことを裕子は知っている。

「飲むよ」

「へぇ、どんな紅茶飲みます？」

「俺はもっぱらダージリンかな」

「私はアッサムをミルクティーにして飲むのが好きなんです。でもダージリンも好きですよ！」

さっきまでとは打って変わって、快活な声でしゃべっている。そういえば裕子は紅茶に詳しかった。なんでも学校で裕子が憧れている先輩の趣味が紅茶なのだ。だからといって自分も同じ趣味にしてしまうところがなんとも裕子らしい。

食事が終わり、私が片付けた食器を洗っているときも二人はずっと紅茶の話で盛り上がっていた。

まぁ、気まずい雰囲気よりかは、いっか。

帰り際、私は裕子にささやいた。

「あのさ、裕子。話つけてくれるって言ってたよね？」

「んーー、えへへ、誠さんっていい人だね！」

味方だと思ってたのに。

第三話　衝突（後書き）

すみません、三週間ほど連載停止します。
でもその間も書き続けますのでまた読みに来てやって下さいね。

第四話　うさぎ小屋の男の子

私の学校には入り口が二つある。正門である南門と、東門だ。家から学校までは近く、徒歩で通える距離にある。そして東門より南門のほうが少しだけ近いのだが、私はあえて少しだけ遠回りな東門から入るようにしている。
私がなぜその、少しだけ遠回りな東門から入るようにしているのかと言うと、一応理由があるのだ。

―――いた。

東門を入ってすぐ右には池がある。そのさらに奥にはうさぎ小屋があり、そこで一人の男子生徒がうさぎの世話をしていた。
私は歩調をゆるめ、さりげなく横目で彼の行動を見た。かがみこんで手を伸ばし、餌を食べているうさぎの背中をそっとなでているようだった。
ふと、彼の名前を呼ぶ声が門の方から聞こえた。

「洋平〜！今日お前日直だろ？急げよ！」

声をかけたのは活発そうな男子だった。

「ちょっと待って。今行くよ」

洋平は慌てた様子で小屋の鍵を掛けると、学生鞄を片手にその男子の元へ駆け寄った。

「なんつーか、よく毎朝うさぎの世話なんかしてられるよな。俺ぜってー飼育委員なんかやりたくないわ」

「まあ、朝起きるのはきついけど、でもうさぎは好きだから。それに週ごとに交代でやってるし」

「ふ～ん、動物好きなやつはそんなもんなんかねぇ」

そんな会話を交わしながら、二人は私の横を通り過ぎていった。その言動を目で追いかけていた私はかけられた声に驚いてしまった。

「おっはよ！こんな場所でぼーっとしてないで早く行くよ！」

裕子だった。そそくさと私を追い越すと振り向いて言った。

「いこっ！」

「あ、うん」

私たちは並んで校舎へと足を進めた。

「で、あの男の子気になってるんだよね？」

昼休み、いつものように教室で昼食をとっていると、開口一番に裕子がそう聞いてきた。その言葉の意味に私は、さっき以上に驚いてしまった。

「まさか、気づいてたの？」

すると裕子は呆れたような表情でため息をついた。

「あのねぇ、あれだけ門の前であの子が気になってるんですって顔してりゃあ、誰だって気づくよ？」

恥ずかしくなった。私の無意識な仕草はそんなふうに見られていたのか。

「それで、告白しないの？」

「しないよ」

あっさり答えた私を見てとても寂しそうな顔をした。

「・・・ねぇ、もしかしてまだあのこと引きずってるの？」

「そんなことないよ、ただ今は恋とか興味ないだけ」

「きっと三島君だって今の麻衣を見たら悲しむと思うな・・・」

同情するような目で私を見てきた。

「なんにも分からないくせに勝手なこと言わないで」

「麻衣・・・」

もうこの話を終えたかった私は

「ちょっとトイレ行ってくる」

と言って席を立った。裕子は何かいいたそうな表情で私の方を見ているようだ。

ドアを開けて廊下に出ようとしたとき、後ろから呼び止められた。

「麻衣！そんなの麻衣らしくないよ！私がなんとかしてあげるから！」

教室にいる生徒の視線が何事かと私たちに集まる。

恥ずかしいな・・・。もう、ほかっといてよ。裕子はこういうところがお節介すぎて嫌だ。私の気持ちを本当に理解してくれるなら何もしないでおこうって思うのが普通でしょ。

何か言い返そうかと思ったがうまい言葉が見つからず、私は視線を泳がせたまま廊下へと急いだ。

第五話　麻衣の独白

恋なんかするべきではなかった。半年たった今でも、私はそう思ってる。

高校一年生のとき、三島君とは同じクラスだった。中学時代の友達だった裕子とは別のクラスだったが、私が彼に恋心を抱いているのを鋭く見抜き、どうアプローチしていこうか悩んでいた私の手助けをしてくれた。勇気を振り絞っての告白。そして、高校一年生の冬に私たちは付き合いだした。彼も私のことを好きだと言ってくれた。

不幸な事故だった。

ということになっているが、あれはきっと私がいけなかったんだ。彼を最後に見たときの表情は今でも鮮明に覚えている。後悔の顔だった。悔しそうな表情を浮かべてまっすぐ私を見つめていた。私とデートしたからこんなことになってしまったのだ。これからずっと続くと思っていた未来が閉ざされてしまったのだ。彼の目指したかった夢も、希望も何もかも。私と出会わなければ、彼は幸せな人生を歩めたはずなのに・・・。

その三日後三島君の家でお通夜が行われた。私は制服に着替え、家を出た。母が何か言っていたはずだが全く覚えていない。先生、生徒を含め大勢の人が出席していた。そこで裕子とも会ったが、何も言えず気まずい空気が流れていた。お経の後、お焼香をあげるため列に並んだ。もうすぐ私の番が来るというところで、三島君の両親が参列者にお辞儀を繰り返しているのに気づいた。母親が顔を上げ、ふと私の方を見て動きが止まった。私も彼女から視線を外せなかった。そして彼女の表情が一変した。まるで害虫を見つけたような顔だった。

私は耐え切れなくなり、列を飛び出して逃げた。彼女は私が最後に

三島君といたことを知っているんだと感じた。そして少なからず私が原因だということも・・・。

私は希望を捨てたわけじゃない。勉強はしっかりやっているし、週末には買い物を楽しんだりもする。高校を卒業したら大学にだって行きたい。

ただ、当分恋愛はする気はない。きっと何年もしないかもしれないし、ちょっとしたことがきっかけでどこかの誰かと結婚するかもしれない。

これから人を好きになるかなんてわからない。

ただ、それだけのことなのだ。

第六話　居間にて

土曜日の朝。
居間に降りるといつものように誠がいた。どうやらメールを打っているようだ。
いつも誠は朝が早い。私が起きる時には必ず先に起きている。ただ、朝食を作ってるれるのはとてもうれしいので大助かりだ。

それにしても本当に誠を信用していいのだろうか。渡された母からの手紙は本物だった。この家に住まわせるなんてよほど信頼してのことだろう。そうでなければ娘を任せたりはできないはずだ。それか、無理やり書かされたという可能性も・・・。脅されて、今もどこかに監禁されているのでは？
まさか。
そんなことをしてなんになるというのだ。
理由がない。

「おはよう、そんなとこでなにしてるのさ」
階段の傍で突っ立ってる私を見て、誠が苦笑していた。私の思考はそこで中断した。
「ん、なんでもないよ、おはよう」
「ならいいんだけど・・・朝飯、味噌汁あるから温めて食べてよ」
「うん」
私は台所に向かった。コンロの上に鍋が置いてあり、蓋を開けると

味噌汁が入っていた。いろんな具があって、悔しいが自分が作るよりもうまそうだ。こんな簡単な料理で負けているということがなお悔しさを感じる。
味噌汁を温め、朝食の用意をして居間に戻った。

「麻衣、このキャラクターみたいなやつってどうやって打つんだ？」

「え？・・・ああ、絵文字のことかぁ。ちょっと携帯貸してみて」

誠から携帯を受け取る。

「あ、この携帯お母さんのと一緒だよ。それならきっと・・」

え・・・？
お母さんと同じ？
背筋に冷たいものが走った。私はその携帯を見つめ続けていた。

「へぇー、そうなんだ、知らなかったなぁ」

視線を上げる。誠の笑顔も、今は私を騙す為の偽りの表情にしか見えない。そんな私を見て誠が言った。

「あれ？もしかしてお母さんが恋しいのかな？今早百合さんからメールきてて、麻衣は元気にしてるかって書いてあったぞ」

「え？」

私から携帯を取ると、その母からしきメールを開いて見せてきた。

「ほんとだ・・・」

それは本当に母からのメールのようだった。いつも近くにいる私が間違えるはずがない。文字だとしても、母の口調そのものだった。私を包んでいた不安はだんだんと薄れていった。

「紅茶いるか？」

私が朝食を食べ終わる頃、誠が聞いてきた。

「うん、もらおうかな」

せっかくの機会なので久しぶりに飲んでみることにした。軽く一口飲む。やはりおいしさが分からない。誠はまた携帯をいじくっていた。

「ふ～ん・・・そうか、麻衣は好きな子がいるのかぁ」

紅茶を口に含んでいた私は、危うく吹き出しそうになった。裕子のやつ！きっとこの前きたときにメアドを交換したんだ。いくら誠さんと仲良くなったからって、そんなことまでばらすなんて信じられない。いったい何を考えてるのか。

「それで、交際を申し込まないの？」

交際を申し込むって・・・・。それにしても裕子と同じことを言ってくるな。

「しません」

私は簡潔に答えた。

「本当にいいのか？手遅れになってから、あの時告げておけばよかったって後悔することになるかもしれないぞ？」

「言って後悔することだってあるじゃないですか」

「そうかなぁ。俺は今の妻にプロポーズして幸せな家庭を築いているけどなぁ」

「・・・・・結婚してるの？」

「してるよ、かわいい娘もいる」

あっさり答える誠に唖然としてしまった。一見大学生くらいに見えるし、彼女ならともかく、奥さんがいて子供までいるようには全然見えなかった。結婚しているということは大学生ではなく社会人なのだろうか。

「仕事は何をされてるんですか？こんなとこに来てて大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫大丈夫。妻にはちゃんと言ってきたしね」

「・・・そんなもんですか」

「そんなもんですよ」

軽く答える誠。いろいろ疑問が残ってるが、これ以上聞くとよからぬ事を聞いてしまいそうな気がしたので話を変えることにした。

「それで、裕子はなにか企んでるんですか？」

誠は少しびっくりしたが、すぐにいつものにこやかな顔をして言った。

「なにも企んでないよ」

嘘だろうな。きっと私と洋平君をデートさせるためにみんなで遊園地に行こう！とか言い出すはずだ。半年前はうれしかったけど今回は・・・・。

それと誠さんまで誘ってどうするつもりなのだろう。まさかこの四人で、とか言い出すんじゃないよね・・・。

第七話　頑なな誘い

時刻は十時十六分。私は今、電車の座席に座っている。
隣には洋平君。それ以外に知り合いはいない。

どうしてこんなことになっているかというと、すべては裕子と誠さんのせいだろう。いや、ぜったいにそうなのだ。
まさか二人で行くとは思わなかった。洋平君もそう思ってるだろう。
四人で行って、私と洋平君を仲良くさせる作戦なんだろうなと軽く考えていた私が間違っていた。裕子は最初から最後まで二人っきりにさせるつもりだったのだ。

時間は遡り、二日前の学校の帰り。裕子は私にこう言ってきた。

「私好きな人がいるのよ」

「そうなんだ、よかったね」

「ちょっとー！ここは普通、誰！？だれなの！？って聞くところじゃないの？」

「ごめんね」

「はぁー・・・なんでそんな冷めてるのかなぁ」

裕子はため息をついた。

「あ、でね、わたしの好きな人っていうのは」

めげずに話を続けてきた。

「誠さんなのよ」

「え??」

「へへ、驚いたでしょ。それでね、麻衣に頼みがあるのよ」

「裕子とデートするように説得してほしいとか?」

「んー、まあそれもあるんだけど、いきなりデートに誘うのも難しいじゃない?だから前みたいにダブルデートみたいな感じでいけば気楽に行けるし!だからお願い!」

私に参加してほしいってことだろう。手のひらを顔の前で合わせて、上目使いで頼み込んできた。

「いやよ、私そういうの無理だから」

すると裕子は、にやついた顔をして言ってきた。

「麻衣〜?私が麻衣と三島君をくっつけたとき、私にこう言ったわよね。ほんとありがとう。裕子が誰かを好きになって困ってるとき絶対協力するから!・・・って」

「・・・・・うん」

覚えていた。そうだった、昔四人で遊園地に行ったときのことだ。
そこで私は三島君と親しくなることができ、ダブルデートを計画してくれた裕子にものすごく感謝したのだった。

「ねぇ、まさかあのときの約束無しにするつもりじゃないでしょうね？」

裕子が余裕の笑みで聞いてくる。

「・・・・ぅ・・」

「なに？聞こえないよ？」

「・・・分かったわよ。その代わり途中から二人ずつで行動するのは無しだからね。それとあくまで裕子と誠さんの仲を深めるのが目的なんだからね」

「りょーかい♪」

ほんとに了解してるんだろうか。

「ところで疑問なんだけど、誠さんと洋平君って全く接点ないよね？」

「ああそれね、任せておいて、うまくやるから！」

どうしても洋平君を連れて行きたいようだ。
そしてもう一つ聞いておきたいことがあった。

「あのさ、誠さん結婚してるって知ってるよね？」

「・・・・マジ？」

「それにしても運が悪かったよね。ケンジも裕子さんも二人して都合が悪くなるなんて」

隣に座る洋平君が話しかけてきた。

「え？・・・ケンジくん？」

「えっと、もしかして名前知らなかったかな。俺の友達で同級生の朝倉健二っていうんだけど・・・」

「あ、そうなんだ、知らなかった。・・・男子が来るとは聞いていたんだけど・・」

裕子のやつ、私はともかく洋平君にまで嘘をついたのか。
きっと健二君も来るからとか言われて誘われたのだろうな。
それにしても洋平君は私としゃべってることは楽しいんだろうか。
そんなことを考える私は変なのだろうか。裕子も言っていたことだけど、昔の私とは性格が変わったように思う。思春期の人の性格なんて変わるものだし、どんなに変わっても私は私だ。今の自分がこうあろうと思っているからその通りに行動しているのだ。自分に素

直になっているからこそ、正しいはずなのだ。

「どうしたの？俺となんかじゃ・・・楽しくないかな」

一瞬私が考えていることが読まれたのかと思ったが、すぐに逆だと思った。そしてその言葉に嫌悪感を抱いた。

「そんなこと言わないでよ」

「あ・・・ごめん」

お互い黙り込む・・・。

きついこと言ったかもしれない。それでも自分が謝るべきなのか分からない。

ほら、こうなるから嫌だったのだ。きっとこの後も暗い感じでデートは進んでいくのだろう。二人ともぎこちない感じで気を使いながら歩き、食事をし、帰りの電車に乗るのだろう。

そんなの・・・いやだ。

こんなとき裕子ならどうするだろう・・・。誠さんなら・・・。私だったら・・・？

「ねぇ、せっかくのデートなんだから楽しんで行こうよ。ね！」

私はありったけの笑顔を彼に向けた。久しぶりだったからちょっと引きつったかも。

「うん、そうだね・・・・で、でーと？？」

しまった、変なことを言ってしまった、そもそも裕子がダブルデートだとか言い出すのがいけないんだ。
洋平君は耳を赤くして視線を外す。
ああ、もう誰かなんとかしてよ。

第八話　動物園

麻衣には恋をすることの大切さを取り戻してほしい。
じゃなければ俺が麻衣の家にやってきた意味がないのだから・・・。

麻衣には「一緒に行くといろいろまずいだろ？」と言って先に家を出てきた。「わかった」とそっけない感じで答えていたので、どうやら疑われずにはすんだようだった。
そして現在、動物園にて裕子と二人で麻衣と洋平の後をつけているところだ。

「ところで、このサングラスって意味あるのかなぁ」

「何もないよりはいいじゃないですか。素のままで来てたら一発でばれてますよ？」

「ほんとかなぁ・・・妙に周りの視線が気になるんだけど」

俺達の近くにいるカップルやら親子連れが、先ほどからこっちをチラチラ見ている。

「あ、麻衣たちが移動しますよ」

俺の言葉は聞こえていないようだ。

まあ、それにしてもほっとした。麻衣がおりの中の動物を見つけると声を上げて指をさし、洋平がそれに答えている。朝出かける前の元気の無さを見たときはどうなることかと不安だったが、これなら

安心だ。
隣で二人を眺めている裕子も満足げに微笑んでいる。
麻衣たちはさらに移動し、洞窟のような場所に入ろうとしていた。
「あんなところにも動物っているのか？」
「あそこにはコウモリとかがいるんだと思います」
洋平が入り口を開けた。ここからだと中は真っ暗に見える。
「おいおい、あんな暗いところに入って大丈夫なのか？」
裕子がくすりと笑う。
「すごい心配してるんですね。もしかして誠さんも麻衣のこと好きだとか言いませんよね？」
「そんなわけないだろう。俺には妻がいる」
そうだ、そんなはずがない。
それにこの気持ちは恋なんかじゃなく、もっと別の・・・・・
「出てくるまでベンチで休んでいようよ」
なぜか落ち込んでいる裕子を促し、ちょうど木陰になっているベンチに腰掛けた。

だいたい半分ぐらいの動物達を見終え、お腹が空いた私たちは食堂に来ていた。昼食を買い、外のテーブルに座った。

「篠宮さんってコウモリ苦手なの？それか暗いところ苦手？」

先ほど私が怖がってたのを棚に上げ、洋平君がからかってくる。

「別に、私は行きたくないっていったのに。洋平君がどうしてもっていうから」

「あはは、からかってごめん。今度は篠宮さんが行きたい場所決めていいからさぁ」

「分かりました。この後はウサギが見れるコースを外してここを真っ直ぐ行きます」

私はオレンジジュースを飲み干した。

「あ、怒ってるんだろ。謝るからさ、ちゃんと全部見て回ろうよ。お願い！」

ちょっとした仕返しのつもりだったが、真剣に頼んでくる洋平君を見てるとなんだかおかしくなって笑った。そんな私を見てぶつぶつ言ってる。

こんな風に心から笑ったのは久しぶりだった。最近では裕子以外とおしゃべりするのも少なかった。

会話の弾んだ食事を終えて、私はちらりと横を見る。サングラスをした二人組みが同じように食事をしていた。あちらも話題が途絶えないようで、こっちに気づく様子も無い。
裕子はちょっとおしゃれな感じのサングラスだが、誠さんのは真っ黒だ。目立つからはずせばいいのになぁ。きっと今日来た人に、どの動物が面白かったかって聞けば彼らが一位だろう。

「そろそろ行こうか」

「そうだね」

私たちは木が生い茂るコースへ向かうため、足を進めた。
ふと、女の子の叫び声が聞こえた。その声はワニを見ることができる場所からで、私たちが行くと、どうやらぬいぐるみを落っことしたみたいだった。

「いやー！あのパンダちゃんがいいの！あれじゃなきゃやだー！」

ほかの人たちに混ざり下を覗くと、水辺にパンダのぬいぐるみが落ちていた。

「どうしようもないね・・・。あとで係員にとってもらうしか・・・」

隣で下を覗きながら洋平君がつぶやいた。確かにここからではどうがんばっても届かない。
女の子にはちょっと我慢してもらって・・・。
急に空が翳ったかと思うと、一人の男がフェンスに足をかけていた。
そしてそのまま飛び降りた。
あれは、誠さん？

遅れて裕子がやってきた。

「誠さんここ乗り越えたよね！？え？なんで！？」

私に聞かれても分からない。難なく着地した誠さんはぬいぐるみを拾い、女の子の方を向いて手を上げた。

「・・・・っと」

俺は着地すると、屈みこんでぬいぐるみを拾った。

なんでわざわざこんなことやってるんだろうな、俺。もしほしければ係員を呼んでとってもらえばいい。汚れてしまったら新しいのを買えばいい。

それでもあの子にとってはこのぬいぐるみは宝物で、母親に買ってもらった大切なものだからあんなに顔を歪ませて泣いてしまうんだろう。それを見るとどうしても・・・・・な。

そんな顔が見たくなくて、わざわざ取りに来ているのは、俺が「篠宮　誠」だからなのだろうか。

俺は立ち上がり、振り向いてぬいぐるみをかかげた。

女の子の泣き顔が見る見るうちに変化していく。自然と自分の顔がほころんでいるのが分かった。

俺はぬいぐるみをその家族のもとへと放り投げた。それは放物線を描いて、母親がキャッチした。女の子の笑顔が見えた。

「誠さん！」

麻衣が叫んでいた。

あーあ、ばれちゃったな。まあ、前からばれてたかもしれないけどね。

麻衣は必死に俺を指さして叫んでいる。

「後ろ後ろ！」

「ん？っ！！」

俺が振り向くと同時に、足が何かにはさまれたような感覚を得た。

それも一瞬のこと、鋭い痛みとともに足を思いっきり引きずられた。

ワニだ！

何をのんきにしていたんだ、俺は。

「くそっ！」

両手と左足でなんとか踏みとどまった。

このままじゃ・・・引き込まれる！

俺は力いっぱい噛まれた足を引き抜いた。

「！」

言葉にならない痛みが走り、頭の中が真っ白になる。地面に転がりながらそれに耐える。右足を見ると、ズボンのすそが破れ、その辺りが真っ赤に染まっていた。

頭上から人々の喧騒が聞こえる・・・。

誠さんは手当てを受けたあと、事務室で園長にこっぴどくしかられていた。
無理も無い。悪いのはワニじゃなく、勝手に入った誠さんなのだから。

それからちょっとした目を離した隙に、誠さんと裕子はいなくなっていた。私たちが電車に乗る頃には晴れていた空は雲が立ち込め、雨の予感がひしひしと伝わってきていた。

家に帰ると誠さんが出迎えてきた。

「おかえり、デートは楽しかった?」

「全部知ってるでしょ?・・・足、大丈夫なんですか?」

「俺はずっと家にいたけど?」

右足を包帯でぐるぐる巻きにしながらしらを切るつもりなのだろうか。

「そんな冗談やめてよ」

「はは・・・、心配させて悪かった。怪我も意外と浅かったし大丈夫だよ」

「・・・・・うん」

「包帯かえるの手伝ってもらっていいか？自分じゃどうもうまくできなくて」

「いいよ」

私は救急箱を取りに行った。
手伝ってほしいと言われても、私自身包帯なんて巻いたことが無かった。それでも今は少しでも誠さんの力になりたかった。あの女の子はとてもうれしそうに笑っていた。私にもあんな時代があったのだろうか。
戸棚を開けると奥に救急箱が見えた。それに手を伸ばして、隣にアルバムが並んでるのに気がついた。
少し、見てみようかな。
私は一番端のアルバムを手に取り、開いた。それは私が1歳にも満たない頃のアルバムだった。そこにある写真には、若かりし時の母と、幼い私と、そして父が・・・・。

・・・・そんなことって・・・・・。

まさか・・・・。

その写真に写っている父は、今日まで一緒に生活してきた誠さんにそっくりだった。

第九話　雨の日に誓う、ひとつの約束

そこに写ってるのは、確かにいつも会話を交わしている誠さんだった。私を抱いている母に寄り添い、爽やかな笑顔をカメラに向けている。

これって・・・・まさか。

私は何かを恐れるように、アルバムを両手で持ち、ゆっくりとした足どりで誠さんのいる部屋へ向かった。

部屋に入ると誠さんが私を見て、そしてアルバムを見た。

「どうしたの？そのアルバム」

私は無言で近づき、先ほどのページを開いた。

誠さんは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに諦めたような、穏やかな顔をした。そのしぐさはつまり肯定なのだろうかと考えたが、その心境は汲み取れなかった。

誠さんが落ち着いた声で話し始めた。

「俺は麻衣のお父さんだよ。天国からやって来たんだ。今まで黙っていてごめんな」

「・・・え、ちょっと、まってよ」

アルバムを見てまさかとは思っていたものの、そんなこと言われてもやはり理解しがたかった。頭の中が混乱している。そんな物語のようなことが現実に起こっているという実感が持てないのだ。

「神様が少しの間一人だけ生き返らせてくれるって言うからさ、みんなでジャンケンしたんだよ。そしたらお父さんが勝っちゃった」

「・・・私のことからかってるんだよね？全部、冗談だよね」

何とか笑おうとしたが、思うように笑顔が作れなかった。

確かに誠さんが父なら納得いく点がある。紅茶が好きなことや、家の間取りを知っていることだ。

「・・・・・」

私の質問には何も答えず視線を落とし、そして遠くを見つめるような目で窓の外を眺めた。私も外の景色を見た。

雨が小降りで降ってきて、やがて本降りになった。

「この雨が止む前に、俺は帰らなくてはいけない」

独り言のように呟いた。

「今までずっと麻衣とお母さんのことを見守ってきたんだ。麻衣が辛い思いをしたことも知っている。その理由も、知っている」

どくんと、心臓が脈打った。

「麻衣、お父さんは麻衣が落ち込んでいる姿は見たくない」

「別に落ち込んでいるわけじゃないよ。学校生活だってちゃんとや

ってる」

「うん、そうだね。それでも三島君がなくなってからは、元気がなくなったように見えるけど？」

「・・・」

全部知られているって嫌だな、と思った。私の心の中に仕舞っておいたものを、無理やり引きずり出される思いだった。

「なぁ麻衣、動物園楽しかったか？」

「・・・」

「お父さんは、あの時の麻衣の笑顔が本当の麻衣の笑顔のように感じたんだよなぁ」

「・・・もういいよ」

「あんな風に幸せに笑ってる麻衣でいてほしいな、裕子だってそれを望んでる」

「もういいって！わざわざ天国からそんなこと言いに来たの？ほんとはせっかく来たのにこんな娘を見てがっかりしてるんでしょ？」

「そんなことない。立派に成長してくれていてうれしかったよ。だから初めて会ったときから俺は笑っていたじゃないか」

「成長したのは外見だけよ。それとただ勉強してるだけ、たいした趣味なんてない。少しだけど一緒に暮らしてきて分かったでしょ？」

「・・・」

今度は父が黙った。その通りだから、何もいい返せないのだろう。私はさらに続けた。

「ねぇ、お母さんから聞いたよ？十五年前、山道を車で走っていたとき交通事故に遭ったんだよね。よそ見していた車に追突されて崖から滑り落ちたって。そのときとっさに私を抱きしめて守ったから死んじゃったんでしょ？一歳にも満たない私なんかほかっていれば助かったかもしれないのに！こんな私なんか―」

パチンッと音がして、視界が揺れた。一瞬何だか分からなかった。ほほの痛みに気づき、自分がはたかれたのだと分かった。わけも分からず、涙が溢れてきた。

「俺が後悔したかって？それは違うよ。確かにこれからもっとやりたいこと、幸せな時間、それらがなくなってしまったのはとても悲しいことだ」

父が真剣な目で私を見ている。

「でもね麻衣。お父さんは麻衣の代わりになれて本当によかったって思ってる。もしあの時自分の身を守って助かったとしても、麻衣が死んでしまったら一生後悔していたと思うんだ。どうしてあのとき庇わなかったのかってずっと胸の中で問い続けたまま生きていったと思う。

麻衣、お父さんは生きるよりも幸せなことをして、それが正解だったって今でも強く思っているよ」

「・・・・」

なぜだか分からないが、悔しくてしかたなかった。悔しくて、悲しくて、胸が詰まりそうだった。

私はこれまで父のことなんか気にもとめないで、ただ始めからいないものだと思っていた自分が恥ずかしかった。

そして父は、穏やかな顔をして言った。

「三島君から伝言。幸せでした、ありがとう・・・・だとさ」

いままで抱えていた罪悪感が、すっと消えていく気持ちがした。それは私がずっと捜し求めていた言葉で、もう二度と聞けないと思っていた人からの言葉だった。

雨はまだ降り続いていた・・・。

「紅茶飲んでいっていいかな。ミルクも買ってあるんだ。麻衣はストレート苦手だろ？ミルクティーにするよ」

誠はそういって立ち上がり、台所へと消えた。

私を気遣ってくれたのだろうか、父が紅茶を用意して運んできてくれるまでには随分と気持ちが落ち着いた。

私は今までの思い出、母のことなど、私が生きてきた十五年間分を話して聞かせた。といってもいままでずっと私たちを見守っていてくれたのなら知っていることばかりだろうけれど、父はそんな顔一つせず私の話を真剣に聞いてくれた。

「そういえば、どうしてデパートで私に声をかけてきたの？」
父は気まずそうな顔をして言った。
「ん、いや・・まいったな」
やっぱりナンパだったんだろうか・・・。
ここまで話して、眠くなってきてしまった。
「今日いろいろあったからかな・・なんだか眠くなってきちゃった・・・」
「疲れたんだよ、今日はもうお休み・・・・」
私はソファに横になった。体が動かないぐらい疲れたのだろうか、確かに今日は多くのことがあった。目を開けているのも辛くなり、私は目を瞑ってまどろみの中に預けた。
「可愛いな・・・麻衣は。お休みなさい」
私の頭を撫で囁くように言うと、部屋を出て行く様に感じた。
・・・ちょっとまって。お父さんはなんて言ってた？
雨が上がる前に帰らなければいけないって・・・・そう言ってたはずだ。
お父さん――。まってお父さん！
ここで眠るわけにはいかない。私は重い体を奮い立たせ立ち上がり、

よろめきながらも玄関へ向かった。
やはり靴がない・・・。そしてあの傘も。
サンダルをうまく履くことができず、そのまま玄関を飛び出し雨の中を走った。石ころが足の裏に食い込んで痛い。雨が私の全身を濡らし服が肌に張り付く。
５０ｍほど先に赤い傘が見えた。

「お父さん・・・・・お父さん！」

私はできる限りの大声で叫んだ。傘の動きが止まり、こちらを振り向いた。
父は驚いた表情をしている。私がこんなずぶ濡れで追いかけてくるなんて思わなかったのだろう。

「麻衣・・・」

私は父の胸に飛び込んだ。父も傘を持っていない方の手で抱きしめてきた。

「お父さん、行かないでよ！まだ話したいことなんて山ほどあるし、一緒に行きたい所だってあるのに・・・」

父は私の耳元に顔を寄せ、囁くように言った。

「だめだよ、麻衣は決してこっちに来てはいけないんだ。生きて、素敵なことをたくさん見つけていくんだよ。悩みも苦しみもこれからいくらでもあるかもしれない。それでも幸せなことはたくさんあるから、休んだっていい、その胸にすこしずつでいいからしまっていきなさい」

その声は少しだけ震えていた。傘で防ぐことのできない一滴の雨が、私の頬に落ちた。私は顔を上げず、そのまま父の胸に埋めていた。

「麻衣、一つだけ約束してくれないか。これから何があっても逃げ出さない、妥協しないって。諦めなければ、きっといい方向に進んでいくから・・・・」

「うん、誓うよ。・・・・ぜったい、だから・・・見ていてね・・・・」

そして私はまどろみの中へと落ちていった・・・・。

気がつくと私は自分の部屋のベットで寝ていた。窓から差し込む太陽の光が眩しい。

もう朝なのだろうか・・・・。

昨日の記憶が蘇ると、飛び起きて一階に駆け下りた。居間に父の姿はない。客間へ急いだがそこにもいない。玄関へ向かうと靴も傘も無くなっていた。

本当に帰ってしまったんだ。

私はサンダルを履き、玄関を出た。空を見上げると雲ひとつ無い青空が広がっていた。

「神様、ありがとう」

私は空に向かって呟いた。

裕子に会いに行こう、そしてありがとうと言おう。
洋平君ともう一度デートしてみよう。きっと私の恋はそれからだ。

携帯には母からメールが届いていた。

「麻衣元気？長い間一人にさせてごめんね。
明日帰ります。お土産楽しみにしててね」

第九話　雨の日に誓う、ひとつの約束（後書き）

続きます。
感想などいただけるとうれしいです。

第十話　雨の中の独白

いい子だったな・・・。
俺は麻衣を寝かしつけた後、再び傘を差して歩いている。もうこの家に戻ってくることはないだろう。頭の中ではさっきまでの麻衣とのことを考えていた。自分の娘もあんな子に育ってほしいとつくづく思う。
しかし、我ながら臭いセリフを咄嗟に思いついたものだ。自分をほめてやりたいよ。彼女の心を動かすことが出来るか心配だったが、上手くいってよかった。早百合さんに家の構造を教えてもらったことや、俺も紅茶が趣味だったことが父親だと思わせるきっかけになったのかな。
それにしても、雨の中を走って追いかけてきたのには驚かされた。彼女の紅茶にだけ睡眠薬を入れておいたのに、まさか自分を追ってくとはね・・・。それだけ父を想ってくれたのだろうか。
驚いたと言えば、アルバムだ。早百合さんの助言でアルバムを見つけるように誘導したんだが、まさか自分の顔が写っているとは思わず、本当に驚いた。きっと俺の写真と合成したんだろうけど、あそこまでやる早百合さんには感心したよ。むしろあれだけで父親だと信じさせられたんじゃないかな。
俺は早百合さんから「娘を元気付けてあげて下さい」と言われて雇われた。そのアルバイトが無事に終わり、後は給料を貰いに行くだけだ。
いつの間にか雨は止んで、雲がうっすらとし明るくなっていた。
さてそろそろ時間だ。雨も上がったことだし、神様のもとに帰りますか。早百合さんという女神様のもとに。

最終話　雨の日に誓った、ひとつの約束

公園につく頃には、夜の帳が辺りを覆っていた。灯りのある場所だけが明るい。
指定された場所には、すでに早百合さんが来ていた。屋根つきの休憩所のベンチに彼女は座っていた。

「お久しぶりです。無事終わりましたよ、傘ありがとうございました」

俺はそう言って借りていた傘を渡した。早百合さんはそれを受け取り、俺を見つめて言った。

「お疲れ様です、誠さん」

「あのー、バイトはもう終わったんですから、その呼び方はやめて下さいよ」

俺たちはお互いに苦笑いした。ただ、麻衣と生活してきて慣れてしまったのか、嫌な気持ちはしなかった。誠さんと呼ばれるのも最後か、と考えると少しだけ寂しく思った。

「麻衣は・・・・どうでしたか？」

悩みは解決したのか聞きたいのだろう。それなら安心してほしい。

「きっと昔のような明るさを取り戻してくれるはずですよ。なんたってもう逃げないって父親と約束したんですから」

「・・・そうですか」

どうやらあまり信じてくれていないらしい。まあ、家に帰って麻衣を見れば杞憂だったと分かってくれるだろうけど。

ちょっとした世間話も途絶えたので、俺は切り出した。

「そろそろ頂いてもいいですかね」

「あら、忘れていましたわ、ごめんなさいね」

そう言って彼女はハンドバッグから茶封筒を取り出した。

「ご確認ください」

俺はそれを受け取り金額を数えると、満足して頷いた。父親のふりをして普通に生活しただけでこんなに貰えるなら、これ以上いいバイトはないだろう。

「それじゃあ俺は帰りますね。またどこかで会ったらお茶でもしましょう」

そう言って俺は、早百合さんに背を向けて歩き出した。片手をあげて軽く手を振る。

しかし、俺の動きは次の言葉によって遮られた。

「どこに帰るの？」

ん？・・・何処ってそりゃ・・・・おいおい。

この年でボケてしまったのかと自分に苦笑しつつも、いくら考えて

も思い出せない。

「えっと、そりゃあ妻と子供のいる家にですよ」

俺は振り返って早百合さんに言った。だが、自分でも違和感を感じていた。

何で俺はアルバイトなんかしてるんだ？妻子持ちだというのに。仕事はどうしたんだ？

「やはり思い出していないんですね・・・。あなたの妻は私ですよ。あなたは篠宮誠です」

意味が分からなかった。

俺が十五年前に死んだ篠宮誠だって？いくらなんでもそんなはずないだろ。

混乱する俺を見て、彼女は話し続けた。

「理解できないのも無理はないと思います。私の夫、篠宮誠は十五年前に事故で死んでいます。そのとき彼の一部を材料に私が作った人形が、あなたなのです」

おいおい、じゃあ俺は人間じゃないって言いたいのか？

「ちょっと待ってくださいよ。そんなとんでも話信じろって言うんですか？」

「そうね・・・その証拠に、怪我をされた足はすでに治ってると思いますよ」

そういえば今は普通に歩けていた。それどころか痛みすら感じず、

怪我をしていたことを忘れていたほどだ。巻かれていた包帯を取って驚いた。包帯に血は付いていたものの、噛まれた場所はすっかり完治していた。

・・・・・・・・なんだよこれ。

「私の家系は昔、藁や紙で人形を作り、穢れを自らの代わりとする術を得ておりました」

「そういうのにつかう人形って本来、身近に置いて降りかかる災厄を祓ったり、病気にならないようにお願いをして川に流すものじゃないですか？」

「私が教えたこと、よく覚えてるではありませんか」

そう言われて俺は複雑な気持ちになった。

「確かにその通りです。しかしそれとは別に、先祖代々人形に魂を移す呪術を習得していたのです」

「そうですか・・・・じゃあその呪術とやらを使って俺を蘇らせたっていうんですか？」

「はい」

「はは・・・、じゃあ俺は紙で出来ているんですかね？」

「いえ、土で作りました」

「・・・・・笑えないですよ」

「・・・申し訳ないとは思います、でも、記憶が戻ってもらうしか・・・」

今の話をまとめるとつまり、俺は誠から作られたクローンで、オリジナルは十五年前に死んでいると。まあそれなら俺と誠の顔がそっくりなのも納得がいくが・・・。何よりも自分が普通の人間ではなく、ただの土人形だという事実にショックを受けた。

「この呪術は、本当はとっくの昔に廃れていていたのです。だから私は、この十五年間ずっと麻衣を育てながら探し続けていました・・・」

「それほど俺に会いたかったんですか。でもすみませんね、俺は何も覚えていないんです」

早百合さんにはよほどそれが辛いように見える。

「そう、なんですよね・・・・。麻衣に会わせれば、もしかしたら記憶が戻るのではと考えてみたのですが、残念です・・・」

「いったいどうしてこんなことを?それほど篠宮誠が恋しかったんですか?」

「・・・私はあなたに約束したのです。必ずあなたを蘇らせてみせると」

そして彼女は、十五年前の事故のことを語り始めた。

あれは、休日に麻衣を乗せて三人で遊びに行った帰りのことだった。私達の車は大雨の中、山道を走っていた。雨足は激しく、数十メートル先が見えにくい状況で、それゆえ対向車が来たときには手遅れであった。誠さんは思いっきりハンドルをきったが接触し、回転すると、私達を乗せた車は山の斜面を滑り降りた。
気がついたときには、車は木にぶつかって止まっており、どちらが上なのか分からないひどい状態だった。窓ガラスは粉々に砕かれ、雨の線によって辛うじてどちらかが地面だと判断できた。

「生きてるか？」

誠さんが聞いてきた。

「・・・ええ、何とか大丈夫みたい」

「俺の体はどうなってる？・・・動かないんだ・・・」

私は少し痛む体を動かし、誠さんの体を見た。思わず悲鳴を上げそうになった。太い木の枝がサイドガラスを突き破り、誠さんの腰を貫いていたのだ。
彼はそんな私の表情を見て悟ったのか、「そうか・・・」と言った。

「わ、わたし人呼んできます・・・！きっと手当てをすれば！」

そんな私を誠さんが制した。

「もう手遅れだ・・・・ここにいてくれ」

「そんなこと・・・そんなこと言わないでよ・・・・・・・・うぅ・・・ぁあああああっ」

私は泣き崩れた。

嫌だ！・・・なんで？どうしてこんなことに！

そんな私とは反対に、誠さんは冷静な面持ちで言った。

「早百合・・・麻衣は無事か？」

私は視界を覆う涙を拭うと、誠さんが抱えている娘に触れた。

麻衣も私を小さな瞳で見返してきて笑った。特にひどい外傷はないようだ。

「大丈夫よ、ほら、こんなに元気に笑ってる」

「よかった・・・」

誠さんはそう言って微笑み、麻衣の頭を撫でた。

「かわいいな・・・麻衣は」

当然麻衣が無事だったのは私もうれしい。でもあなたは・・・・。

どうしてそんな風に笑っていられるんですか。

誠さんは私のほうに顔を向けて言った。

「早百合、ごめんな・・・・今までありがとう」

私は彼にしがみついた。これ以上彼を直視していられなかった。

「嫌ですよ！・・・そんなこと言わないで下さい！私と一緒に幸せな家庭を築いていこうって、言ってくれたじゃないですか！子供を愛して、一緒に年をとっていこうって・・・。嘘にするつもりですか！？」

「・・・・あぁ・・・ごめんな」

「ごめんはもういいですから！お願いです・・・・・・・・・・・・たすけて・・・・」

彼の手が、私の頬に触れた。

「・・・麻衣は将来、俺に似てすごい美人になるぞ？」

なんで、こんなときまで冗談言ってるんです・・・・。

ただ、笑顔を作ろうとする彼の顔には、もう元気が無くなっていた。

私はもう何も言い返してやれなかった。

「誠さん・・・誠さん！？」

「・・・・・」

「誠さん！誓います・・・成長した麻衣に会わせてみせます。神への冒涜だって構いません！何年かかっても会わせてみせますから！」

誠さんはもう、何も答えてくれなかった。

「まだ、思い出しませんか？」

彼女の泣きそうな、はにかんだ笑みを見た瞬間、記憶が脳裏に甦った。

降りしきる雨。手で顔を覆って泣きじゃくる早百合。
俺は破損した車の中で幼い麻衣を抱きかかえている。
腰には深々と木の枝が貫いている。
俺の意識はだんだんと薄くなり、やがて真っ暗になった。

「十五年間、辛かったろう」

「・・・・・・はい」

俺は早百合を強く抱きしめた。彼女は今にも泣き出しそうな顔をしていた。
そうだ、この匂い、この感触、どんなに年をとっても早百合だった。
ああ、俺は生きてるんだ。今ここにいるんだ。

「麻衣に、たいしたことは言ってやれなかったぞ？」

「そうね、それでも大丈夫よ。あなたはあなたなのだから」

例え俺が篠宮誠の分身だったとしても構わない。
俺は確かな記憶を持って、今ここに存在しているのだから。

最終話　雨の日に誓った、ひとつの約束（後書き）

ここまで読んでくれたみなさんありがとうございました。
初投稿作品でした。小説書くって大変なんですね・・・。文章力、矛盾点など問題は多々ありますが勘弁してやって下さい（笑）感想はいつでもお待ちしております。
次はコメディでも書こうかと思ってます。
それでは！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9457e/

雨の日に誓う、ひとつの約束

2010年10月29日01時24分発行